広報用

令和６年 能登半島地震
石川県輪島市への職員災害派遣

【 報 告 書 】

奄美市 総務部 総務課 職員係

Amami City

派遣の概要

広報用

災害派遣名	令和６年 能登半島地震 対口支援
派遣先	石川県輪島市
日程	令和６年５月16日（木）～24日（金）
派遣職員	小林　千香子（プロジェクト推進課） 池田　一城（建築住宅課） 麓川　正幸（企画調整課（奄美市開発公社））
業務内容	住家被害認定の二次調査 【目的】 　全壊半壊等について，自治体が証明（罹災証明）するための調査。 　二次調査は，一次調査を受け，被災者から再調査申請があった住家を，被災者立ち合いで再調査するもの。

Amami City

派遣の概要

広報用

◆ 出発式の様子　5/14（火）

1　開式
2　派遣職員への辞令交付
3　激励のことば
　　奄美市長　安田　壮平
4　決意表明
　　災害派遣職員３名
5　閉式

◆ 報告会の様子　5/30（木）

Amami City

① 災害派遣職員の報告
小林　千香子（プロジェクト推進課）

広報用

◆派遣希望の動機
　能登半島地震の発災を受け、建築に携わる者として、何か役に立つ事が出来ればという思いから、今回の対口支援に参加することを希望した。

◆現地での作業内容
　現地での活動内容は、被害建物一次調査の判定に不服がある被災者からの申請に基づき実施する二次調査である。
　被災者の立ち合いのもと行う調査となっており、外観（外壁、屋根、基礎）に加え内観（内壁、天井、床、建具）の状況により評価を行う。
　固定資産台帳等をもとに、現場での調査を実施するが、増改築や、図面が存在しない物件もあるため、現地測量にて製図する機会もあり、建築技師の必要性を実感した。
　ただし、建物の判定については建築的な視点というよりは、マニュアルによる判定が重視されており、実際に現場でチームになった他自治体の職員の中に建築技師は少数であり、さまざまな分野の職員が現地のOJTにより業務をこなしていた。

◆派遣を通して感じた事
　個人的には、もっと被災地の為に出来る事がなかったのかと自責の念が残り、またこのような機会があれば参加したいが、実際に災害がありその運営をすると考えた時に必要なのは、一人のスペシャリストではなく多くの経験者だと感じた。

　今後、このような機会がある際には、臆することなく、ぜひ多くの職員に経験して頂きたいと感じた。

　災害対応を続ける輪島市の職員は、自身も被災者でありながら業務優先で奮闘している様子がうかがえた。被害にあわれた皆様の1日も早い復興と、今回の災害に対する息の長い支援を続くことを願う。

　今回の活動を通して、被災自治体の運営について多くの学びが得られた。
　また、本市に関わらず地域において災害が発生した際には、地域の皆様に寄り添った支援がスムーズに実施できるよう、今回の経験を活かしたいと考えている。

① 災害派遣職員の報告
小林　千香子（プロジェクト推進課）

広報用

地盤沈下により30ｃｍ程の高低差が
生じている市役所エントランス付近

転倒したRC造７階建てビル
基礎のフーチングに杭が抜けた痕跡がある

山間部における土砂災害により，
建物内部まで土砂が流出

中心部の倒壊した木造建物
解体作業が進まず２次被害への影響がある

地盤が隆起し海面が露出している
輪島市北部沿岸

庁舎内での作業状況
調査したデータをもとに被害のランクを判定する

Amami City

② 災害派遣職員の報告
池田　一城（建築住宅課）

広報用

[派遣を希望した理由]

平成22年奄美豪雨の際に奄美市も全国から支援を受けており，その恩返しとして被災地の力になりたいと思ったことと，地震などによる災害は奄美でも今後起こり得る事象であり，実際の現場での経験を業務に活かしたいとの思いから，派遣を希望した。

[業務概要：被害家屋認定調査（2次調査）]

被害家屋認定調査は，災害による家屋の被害の程度を自治体が証明（罹災証明書を発行）するために必要な調査であり，1次調査が外観※1のみで判定されるのに対し，2次調査は外観に加え内観※2も調査したうえで判定を行う。2次調査は，1次調査の判定結果に不服があるとして申し出のあった被災者立会いのもと実施するものであり，判定結果※3によって受けることの出来る行政支援内容が変わるため，被災者に寄り添った丁寧な対応が求められる。

[一日の業務の流れ]

5：30宿舎（金沢市）出発→8：00輪島市役所集合・準備→現地にて被害家屋調査（1～3件/日）→庁舎へ戻り，調査データの整理・入力→調査結果まとめ・輪島市へ提出→翌日の調査資料の準備→17：30～19：00頃退庁→20：00～21：30頃宿舎（金沢市）着

[業務の状況]

鹿児島県チーム第12陣※4のメンバーとして，全国各地の自治体※5職員と共に4～5名で班を編成して調査を実施した。派遣職員のほとんどは事務職※6であり，私のような技術職は少数であった。私を含め，被害家屋認定調査は初めてという職員ばかりで，その点では事務職も技術職も同様の立場ではあったが，建築に関する知識・経験を活かせる場面も多く，今後同じような業務を担う派遣事業があるならば，技術職員を一定程度確保した方が業務の効率化が図れるのではないかと感じた。

[現地の状況]

道路については必要最低限の修繕が施されているものの，町並み全体としては被災当時そのままと言って良いほど復旧が進んでいない印象を受けた。信号機が傾き，倒壊家屋が歩道を完全に塞いでいたが，いずれも手付かずのままであった。

マリンタウン地区においては岸壁背後の沈下により数十メートルに渡って地盤面に亀裂が走っていたが，やはり手付かずのまま，立入禁止措置すら施されていない状況であった。そのすぐ傍では本来陸上競技場やサッカーグラウンドであった敷地に応急仮設住宅が建ち並んでおり，緑地公園の隅の方で子供たちがボールを蹴って遊んでいる姿が印象的であった。

また，調査先へ向かう途中，崩壊土砂により道路が寸断されている現場に遭遇し，迂回せざるを得ないということもあった。

市内の道路状況については，市役所庁舎内へ地図が掲示してあり，通行止め箇所等について周知がなされていたが，当該箇所は記載されておらず，4ヵ月以上経過してなお，被害の全容把握には至っていないことを実感させられた。

復旧が進まない理由として，公費解体等の行政手続きに時間を要していることや，半島という地理的な要因もあるが，インフラ整備を担う業者をはじめとした人手不足が大きいとのことである。

[行政職員として感じたこと]

同じ班になった熊本の職員から8年前の熊本地震の経験を聴く機会があった。当時，自身も被災者でありながら，市の職員として市民の苦情対応に当たったという。地震直後の慌しい状況の中，ともすれば感情的な苦情も多く寄せられ，対応に苦慮したそうだ。今回派遣先の輪島市でも，調査先で出会う方々の多くは「遠い所からわざわざ有難う」と我々を気遣って下さる方ばかりだったが，中には行政側の対応への不満を漏らす方も少なからず居られた。

我々派遣職員はわずか一週間という短い期間での対応だったが，輪島市の職員はこの先も相当な期間に渡って，被災者の方々に寄り添った対応が求められ続けることになる。先述した熊本の職員によると，熊本地震で復旧まで5年かかったそうだが，能登半島の場合は地理的な状況もあり，さらに長い期間がかかるのではないかと言われている。

今回，輪島市職員と接する機会は殆ど無く，直接話を伺うことは出来なかったが，その心労は計り知れない。もちろん行政職員である以上，全体の奉仕者としてその職責を全うすることは義務であり当然のことではあるが，彼ら自身もまた被災者であることを忘れてはならない。

[注釈]

※1）外壁，屋根，基礎等

※2）天井，内壁，床，建具等

※3）全壊，大規模半壊，中規模半壊，半壊，準半壊，一部損壊の6段階

※4）県2名，霧島市2名，いちき串木野市2名，奄美市3名，知名町1名，計10名により編成

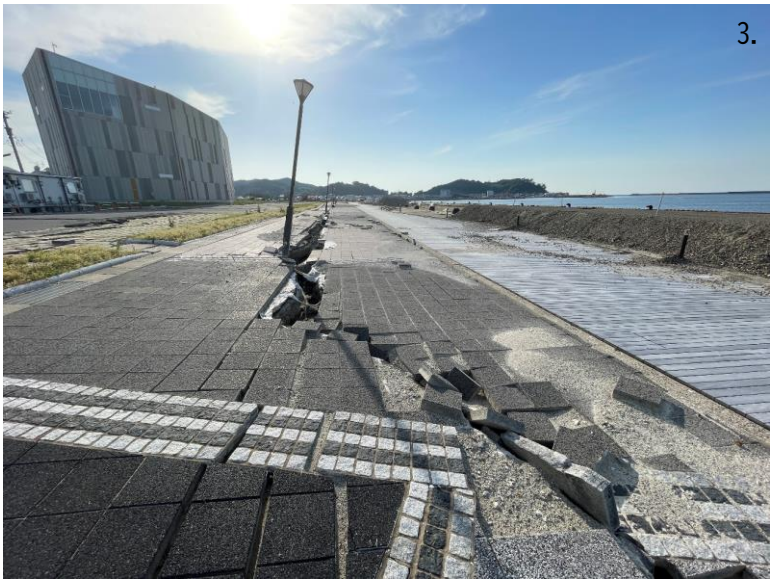
※5）熊本，宮崎，福岡，山口，広島，大阪，三重，静岡，東京，岐阜，長野，石川　それぞれの都府県及び市区町村

※6）所属部署は税務や危機管理系が多かった

Amami City

② 災害派遣職員の報告
池田　一城（建築住宅課）

広報用



［写真］

1. 本来陸上競技場であった敷地に応急仮設住宅が建ち並ぶ
2. 緑地公園で遊ぶ子供たち すぐ右奥は写真3の岸壁である
3. 岸壁背後の沈下による亀裂 左奥は輪島キリコ会館（臨時休業中）
4. 市街地のゾーン30 下校する子供たち
5. 傾いた信号機 電気は復旧しているためそのまま供用されている
   左奥は輪島市役所本庁舎
6. 市街地中央を走る都市計画道路 倒壊家屋が歩道を塞ぐ

Amami City

広報用

③ 災害派遣職員の報告
麓川　正幸（企画調整課（奄美市開発公社））

◆ 被災現場（家屋や街）

被災当時の状況がそのまま残っている。（崩壊家屋や，家屋内の散乱等）理由は様々あると思うが，解体するにも業者が少ない為，進んでいない。(解体進捗度2%程度)

仮設住宅へは最低限の私物持込みなのか被災家屋内は散乱している。また，被災家屋調査待ちの為，修繕や片付けが進めれない現状もある。

◆ 住民の状況

被災家屋に帰宅できない為，街の人影は見られない。高齢者はコミュニティーが崩壊しており，家屋内で過ごしているのか，仮設住宅近辺で人影は感じられない。食事処兼銭湯がある為，住民の憩いの場として機能していた。少ない店舗（食事処やお土産屋）が現在も営業している為，住民の一部は働いていた。そこで働けている時間だけは心理的な被災影響を緩和できているようだった。

学生は小・中・高関係なく，楽しそうに友達とおしゃべりをしながら登下校している姿を見かけ，被災者には見えない逞しさを感じた。(表面的な部分かもしれないが。)

◆ 復興の見通し

解体進捗が進まない状況の為，この1～2年は現状変わらないと思われる。熊本地震を経験した熊本県自治体の職員も5年程度で徐々に復興の形が進んでくるはずではという談話があった。

◆ 派遣職員が被災地で行った内容

被災家屋の罹災証明を発行する為，家屋内部も調査する2次調査を行った。これを受けて住民は手続き（公費解体・再建支援等）が進む事になるが，現状，業者不足が影響している。

◆ 感想

「百聞は一見にしかず」の言葉どおり，現地は想像以上でした。その空気感を経験できた事は人生において大変貴重でした。

有事の際はこの経験を活かせるよう精進するとともに，このような機会をいただけた事に感謝して締めたいと思います。

Amami City

③ 災害派遣職員の報告
麓川　正幸（企画調整課（奄美市開発公社））

広報用

輪島市中心街は現在も
全壊家屋がいたる場所でみられる。

輪島朝市火事現場
今も焼けた臭いが残っている。

輪島市街地を一望
（左奥に五島屋ビルが倒壊）

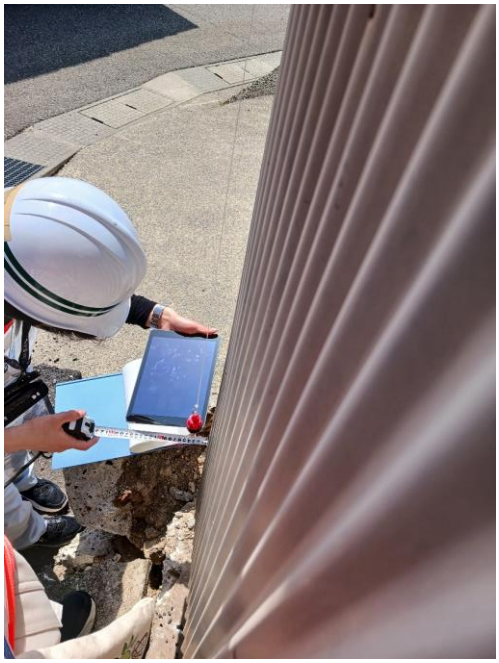
高速道路被災状況

○ １日の流れ（R6.4.15時点）

５：３０	ホテル発（バス乗車）
８：１５	輪島市役所着 調査準備（道具の確認等）
８：３０	朝礼（班長会議）
８：４５	市役所発（レンタカー乗車）
９：１５～ １０：３０	訪問調査（１軒目）
	【移動】
１１：００～ １２：３０	訪問調査（２軒目）
１２：３０～ １３：３０	休憩・昼食
	【移動】
１４：００～ １５：３０	訪問調査（３軒目）
	【移動】
１６：００	市役所着
１６：１０～ １７：１５	調査結果のとりまとめ・報告 翌日の調査の準備
１７：１５～ １８：００	他の班の業務の手伝い
１８：３０	輪島市役所発（バス乗車）
２１：００	ホテル着

※　上記の時刻は目安であり，鹿児島チームが属する班の調査場所や家屋の状況等によって時間は前後します。

鹿児島県チーム
１日の作業スケジュール



現場での調査状況

Amami City